

日本ヘーゲル学会  
第 28 回研究大会  
発表レジュメ

2018 年 12 月 22 日（土）中央大学後楽園校舎

開催校責任者：吉田 達

連絡先：〒112-8551

東京都文京区春日 1-13-27 TEL 03-3817-1711（代表）

---

## 【個人研究発表要旨（1）】

### 『精神現象学』における人倫的行為 ——実体の主体化と行為における自然——

服部 悠（法政大学）

『精神現象学』において叙述される人倫的行為は、実体—主体説の否定性の論理に規定された行為であり、また、この論理が具体的に展開される際立った現場である。本発表では、この人倫的行為のあり方を分析して特徴を明らかにするとともに、その特徴の根底にある人倫における自然の働きを考察する。議論の概要は以下のようになる。

まずテキストの該当箇所を讀解し、実体の主体化という根本的事態を背景にもつ人倫的行為の叙述が行為論としてもつ独自のあり方を確認する。行為の本質を行為過程の全体的な展開を通じて捉えるという点が特に問題となる。ヘーゲルはそのような行為の全体的な展開を「為すこと Tun」、「行動 Handlung」、「所為 Tat」といった複数の用語を用いて叙述する。すなわち、人倫的「行動」は行為者自らの性格に基づいてこれをそのまま実現する行為として語られる。「行動」は行為者の性格や意図と実現される所産との同一性に規定される。一方、「所為」においては、行為者の意図を離れむしろそれを否定するような所産が発生する。この意味での「所為」は行為において現れる分裂に規定される。そして、人倫的に「為すこと」は「行動」と「所為」の両者を統合する全体的な行為のあり方として語られる。行為および現実の同一性と分裂とが表裏一体に結び付いて展開される全体的な過程として「為すこと」が叙述されることにより、実体の主体化の運動性と行為が結び付く。

次に、この人倫的行為の舞台であるギリシア的人倫の『精神現象学』における位置付けについて、関連主要解釈を吟味しつつ考察する。人倫的行為が語られる当該箇所は、古代ギリシアの人倫世界を舞台とし、著作全体を通して語られる精神の現実化の道程の中の一つの段階として叙述される。この人倫世界の段階に対しては、以前の段階から進んで精神のあり方がより展開されていると認められる積極的な意義と、まだ展開の途上であり十全な展開を後の段階に持ち越さなくてはならない限界との両方が認められる。この積極的意義と限界とを別々に取りあげて規定するのが従来の研究の手法の基本となっている。しかし、精神の現実化の道程において、一つの段階の積極的意義と限界とは表裏一体である。そしてこの段階の精神の限界は自然による規定を被っていることにあるとされることから、この段階で精神と自然とが表裏一体に重なっている事態をどう捉えるかが問題となる。

そこで最後に、人倫における自然のあり方を考察し、それが人倫の限界と積極的意義を同時に規定することになる根拠を見届ける。人倫において自然は、男女二種類の人倫的意識が各々の本質として引き受ける「性格」という仕方で現れる。自然によって一方的に規

定されたこの性格は、各々が一面的なものである。この一面性により人倫的意識は、両性の掟が並存する人倫世界の全体性を知らずに「行動」せざるをえない。しかし両性の性格は、二つに分かれつつ根本において表裏一体に結び付く関係にあるので、男女の対立によって一方が他方を否定すれば、それは自分自身を否定する「所為」をもたらす。性格としての自然は、一面的な無媒介性の背後に媒介関係を蔵しているのだ。こうして人倫的に「為すこと」は、自然による規定の一面性を媒介に精神の全体的な必然性を導く。

## 【個人研究発表要旨（2）】

### 〈導入〉としての『ブルーノ』

#### ——同一哲学の見過された側面——

加藤 紫苑（京都大学）

一般にシェリングの同一哲学の絶対的な知の立場においては、常識的な知の立場との和解ないし接続がうまく果たされておらず、このことがシェリング的な絶対者の哲学の欠陥であると長い間考えられてきた。このような理解が定着した最大の原因はヘーゲルの『精神の現象学』の「序論 Vorrede」におけるシェリング批判であったと思われる。ヘーゲルは、『私の哲学体系の叙述』の冒頭において語られていた同一哲学の一面（ここでシェリングは自己と同じ立場に立つように《要求》するのみであった）を強調し、それを「ピストルから発射されでもしたかのように、無媒介にいきなり絶対知から始めて、その他の諸立場は一顧にも値しないと宣言するだけで片づけてしまう感激」という言葉で批判した。もちろんヘーゲルのシェリング批判には正鵠を射ている部分もある。しかし1802年の対話篇『ブルーノ』の内容は、このような広く流布している見解に、少なくとも修正を迫るものなのではないだろうか。

『ブルーノ』はシェリングの公刊著作の中では最もよく読まれてきた著作の一つである。それにもかかわらず、ほとんど本格的な研究の対象とされたことがない。ようやくこの点についての自覚が生じ（例えば、イエシュケとアルント『カント以後のドイツ古典哲学』2012年）、既知の著作から未知の著作へと位置づけが一変したというのが『ブルーノ』をめぐる最近の研究状況である。S・オットーの言うように『ブルーノ』は「彼 [=シェリング] の最高度に暗号化され、おそらくそれゆえに研究によって比較的になぜかにしか注目されていないテキストの一つ」なのである。

こうした状況を踏まえて本発表では、最初に『ブルーノ』について二つの基本的な事項を確認する。第一に、同一哲学の成立という出来事のコアにあるのは《真と美の統一》の思想の成立であり、このコアに焦点を絞って詳細に論じているのが『ブルーノ』である、ということであり、第二に、その論述の仕方には同一哲学の他の著作には見られない独自性、つまり自分の新しい哲学的立場まで導くことを目的として、その立場のコア部分をフィヒテの哲学的立場との関係において叙述する、という特徴があるということである。

この二点を確認した上で、次に同一哲学に占める『ブルーノ』の特殊な位置を明らかに

していく。『ブルーノ』はヘーゲルの『フィヒテとシェリングの哲学体系の差異』と、ある意味において共通の主題（両哲学の差異）を扱っている。ところが対話形式に上述の機能（フィヒテの立場を前提としつつ、それとの関係において自分の新しい哲学的立場の核心を叙述し、この高次の立場へと導く）を担わせることによって、『差異論文』の構想をはみ出す面をもっている。このような面は『超越論的哲学の体系』に見られる対話構造を継承・発展させたものと考えられる。しかし『ブルーノ』がこのような意味での対話構造をもっているとすると、それはヘーゲルの『精神の現象学』に先駆けて、それと一つのモチーフを共有しているように思われる。つまり《意識の立場に立脚している哲学と絶対的認識に立脚している自らの立場との和解》というモチーフである。確かにヘーゲルほど複雑な洗練されたものではないかもしれないが、このようなモチーフを共有している限りにおいて、『ブルーノ』は同一哲学の体系に対して、ちょうど『精神の現象学』がヘーゲルの哲学体系に対してもっているのと類比的な位置を、つまり体系への〈導入〉という位置を占めているのである。

### 【個人研究発表要旨（3）】

#### **Hegels kritisches Potenzial für die Neurowissenschaften**

Till Nessmann

Die Frage nach dem menschlichen Bewusstsein und seiner Beschaffenheit stellt sich, trotz jahrhundertealter Tradition, nach wie vor. Ebenso wie diese Frage scheint es auch nach wie vor verschiedenste Lösungsansätze für das alte Leib-Seele-Problem zu geben. Da beide Fragen unzertrennlich an die menschliche Existenz geknüpft sind, ist es selbstverständlich, dass sie nach wie vor gestellt werden. Die modernen Neuro- und Kognitionswissenschaften sind hierfür sicherlich moderne und repräsentative wissenschaftliche Erklärungsversuche.

Sie haben unter anderem den Anspruch, das alte Leib-Seele-Problem mithilfe ihren modernen empirischen Fortbewegungsmethoden neu aufzuarbeiten. Ausgehend von der Forschung am sinnlich wahrnehmbaren und materiellen Organ, dem Gehirn, sollen Rückschlüsse auf die tatsächliche Verfasstheit des Mentalen/ des Geistigen/ des Bewusstseins gewonnen werden und damit auch ganz nebenbei das Verhältnis beider, wie Descartes schon sagte, Substanzen gewonnen werden. Oder, um den zweiten bekannten modernen Ansatz zu nennen, mehr über die Identität von Materiellem und Geist herauszufinden.

Das diese Herangehensweise und ihr Implikationen möglicherweise einem weitreichenden Widerspruch aufsitzen, welchen sie nicht produktiv mit in ihre Forschung integrieren können, wurde schon häufiger aus verschiedenen Positionen heraus zu Recht kritisiert. In diesem Vortrag soll es sich um einen Versuch der Kritik mithilfe einiger ausgewählter Stellen aus Hegels Phänomenologie des Geistes drehen um einerseits dem tatsächlich existenten Widerspruch zwischen Materiellem und Ide-

ellem gerecht zu werden und andererseits einem der wichtigsten modernen Kritiker eines solchen Positivismus Gehör zu verschaffen. Weitergehend bietet eine solche akribische materiale Untersuchung Hegels die Möglichkeit eine ‚gesunde‘ Basis für aktuelle Ansätze in den Neurowissenschaften und somit beispielsweise auch in der KI-Forschung zu bieten.

#### 【個人研究発表要旨（４）】

##### 観念の連合と知力の井泉

栗原 隆（新潟大学）

『エンツュクロペディー』の「人間学」や「心理学」に、「私」が、意識されないまま、不分明で曖昧な、さまざまな想念を貯蔵している「堅坑（Schacht）」に擬えられる、不思議な比喩が出てくる。「私は全く単純なもの(ein ganz Einfaches)であって、こうした〔感覚規定や表象、知識記憶などの〕すべてのものが実在することのないまま保存されているような、規定を欠いた堅坑である」 (§403: SW. X, 122 :GW. XIX, 303 :GW. XX,401)。その堅坑は、心像が想起されて概念となる働きとともに、他方では、経験の記憶が心の暗い奥底に澱のように沈殿して眠りに就く内化という、両方向の働きが生じる知性の働きであることが強調されていた。堅坑は、心の暗闇から、概念化を経て清澄なる精神の自己知の高みへと心像が上昇するとともに、知が忘却や連想へと下降したりする往還の通路として機能すると見定められていた。

「限りなく多くの像や表象から成る世界が、意識されないままに保存されている闇夜の堅坑(nächtlicher Schacht)として知性を捉えることは、一面では概念を具体的なものとして捉えようという普遍的な要求である。それはたとえば、樹木の展開するなかにあってこそ実在している規定性をすべて、胚芽(Keim)が潜在的な可能性のうち肯定的に包括しているという具合に、胚芽を捉えることが要求されるのと同様である」 (§453: SW. X,260 : GW. XIX,332 : GW. XX,446f.)。このように堅坑としての知性が働くのとは違って、連想などによって覚えられている記憶は、知性の奥底からもたらされるものではないとされた。「堅坑」とはいかにも不思議な比喩ではあるが、存外、ヘーゲルにとっては、それほど奇妙な比喩ではなかったのかもしれない。

「ヨブ記」 28章4節や「サムエル記下」 5章8節に「Schacht」は登場する。シュテッフェンス (Steffens, Henrich) の『地識学＝地学的論考 (Geognostisch=geologische Aufsätze)』 (1810)に、オルデスローエの温泉についての記述がある。「オルデスローエで堆積岩層を、古代にあつて堅坑 (Schacht) を掘ることができたかどうかは、疑わしいままである」 (92)。それなら「堅坑」の淵源はシュテッフェンスかと言うと、必ずしもそうだとは言えない。

ヘーゲルにおける「堅坑」の初出は、『ハイデルベルク・エンツュクロペディー』 376 節への覚書だと思われる。該当の本文では観念連合へと論及されている箇所である。「表象を所有している中で活動的な知性は、再生産的な構想力、すなわちさまざまな心像を自我

自身の内面性から呼び起こすことである。具体的な心像を関連づけることは、差し当たりは知性が、保存されていた外的で無媒介的な空間や時間と心像とを関連付けることである。(…)再生産された内容は、知性の自己同一的な統一に属するものとして、知性の内奥から表象へと進み出るものとして、普遍的な表象であって、具体的な表象が連合している関連である」 (§376: GW.XIII,211f.)。

ここから見て取るべきは、ヘーゲルが、知性の内奥からの心像の生成を、「観念連合」に代わって、知性の豎坑の比喻で説明しようとしているということである。「さまざまな表象の連合は、それゆえ、個別的な表象を普遍的な表象のもとへと包摂することである」 (§377: GW. XIII,213)ともされている。376節の観念連合についてヘーゲル・アルヒーフは、ロックの『人間知性論』、ヒュームの『人性論』への参照を指示している。確かに、ラインホルトの『哲学知の基礎について(Ueber das Fundament des philosophisches Wissens)』(1791)では、こうした事情が垣間見られもするの事実である。「ロックは、経験から汲み取られる単純な表象・観念のうちに、ライプニッツは生得的な表象・観念のうちに、(…)哲学知の基礎を捉えたが、それは、経験主義者と合理主義者にとって唯一可能な基礎だった」(Fundament,44)。こうしてラインホルトは、「表象のならびに表象による起源(Ursprung)について、人間の知の源泉(Quelle)について、偉大な人士たちが論争を交わした主張の中に真理を確保すること」(Fundament,56)が予感されていたことを承けて、カントは経験の可能性のうちに「哲学知の基礎」(Fundament,62)を発見したとする。とはいえそれは、ラインホルトにとっては哲学知のすべてを基礎づけるものではなく、哲学知の一部を基礎づけるものでしかなかった。従ってラインホルトは、単純観念や生得観念を、知の基礎である「表象の起源」や「知の源泉」としては斥けたのである。

こうした論述は、ヘーゲルの知悉するところであったに違いない。しかし、『ハイデルベルク・エンツュクロペディー』の376節では、「観念連合の法則」へと論及され、「連合する構想に従って心臓や表象に即して進めたところで(…)知性の規定はまだ、まったく形式的な普遍性である」 (§376: GW. XIII,212)とされている。ここで「観念連合の法則」の「法則」に着目するなら、まずはバルディリ(Christoph Gottfried Bardili)の『観念連合の法則について(Ueber die Gesetze der Ideenassoziation)』(1796)を想起するべきかもしれない。他に「観念連合の法則」が語られる文脈に着目するなら、私たちはドラマティックな思想史の水脈に逢着することができる。本発表は「観念連合の法則」に着目して、「知性の豎坑」という比喻の淵源を明らかにすることを目指す。

## 【個人研究発表要旨（5）】

### 『イロニーの概念』のキルケゴールはヘーゲル主義者か ——ヘーゲルの歴史哲学とイロニーの不安——

大坪 哲也（静岡英和学院大学）

本稿はキルケゴールの学位論文『イロニーの概念』とヘーゲル哲学との関係性を再考する論考である。『イロニーの概念』は、一見すればキルケゴールの初期思想の代表作として、ヘーゲル哲学の影響を多分に受けた著作だと見做される。しかし研究史を振り返れば、この初期思想自体がヘーゲル哲学に対してアイロニカルな態度をとっており、キルケゴールは言わばヘーゲリアンを偽装することによって、この論文のなかで間接的かつアイロニカルにヘーゲルを批判したという見解が支配的であった。これまでの研究史を強く規定してきた Mesnard や Thulstrup は、この初期の学位論文をキルケゴールの後の仮名著作活動に関連付けることによって、古代ギリシャのエイロネイア（εἰρωνεία）[偽装された無知]という主題が、キルケゴールに「仮名」著者の着想を与え、キルケゴールはソクラテスのイロニーから仮名著者になるための本質的な術を学んだと理解したのである。その意味で実名著作であるこの初期の学位論文は、すでに仮名著作の発想で書かれていると分析され、キルケゴールは初期思想において早くもヘーゲルに対する批判的な立場を確立していたと結論付けられた。こうした Thulstrup 以来の歴史的客観的研究は、初期思想と仮名著作活動の連続的な一貫性を強く主張することで、初期思想からすでにヘーゲルとの積極的な影響関係を認めることをますます困難なものにしてきたのである。こうした Thulstrup らによって決定付けられてきた初期思想の解釈に根本的なメスを入れたのが、長くコペンハーゲン大学キルケゴールリサーチセンターの教授を務め、現ハーバード大学教授の Jon Stewart である。Stewart によれば、キルケゴールのヘーゲルへの関係は、ヘーゲル批判や受容問題も含めて、デンマークヘーゲル主義との媒介関係を抜きに考えることはできない。彼の見解はキルケゴールの 19 世紀デンマーク語テキストが持つ、テキストの媒介性の重要性を改めて認識させ、これまで歴史研究のなかで排除されてきたヘーゲル哲学と、デンマークヘーゲル主義によって媒介されたヘーゲルとの影響史を再び我々の手に取り戻させたと言えよう。本稿は研究史上の解釈学的構成要件を根本的に見直すことで、キルケゴール初期思想における〈ヘーゲル主義〉を可能な限り明らかにする試みである。特に研究史において今もってほとんど明示的になっていない、デンマークヘーゲル主義者、アドルフ・アドラー(Adolph Peter Adler, 1812 -1869)の初期思想との関係性において、『イロニーの概念』のヘーゲル主義を再考する。我々は、キルケゴールがヘーゲルの歴史哲学を積極的に継承したうえで、アドラー的な観点で世界精神における個人を考え、絶対精神が過ぎ去し後の「孤立した主体性」、「存在の単独性としての主体性」に接近したと理解するのである。本稿は、『イロニーの概念』のキルケゴールが、ヘーゲルの歴史哲学を肯定的に踏襲し、アドラーのヘーゲル主義に接近したと考察することによって、ヘーゲル哲学と単独者思想との積極的な影響関係を再考する試みである。

---

## 【シンポジウム要旨（1）】

### ヘーゲルにおける性差について ——『精神現象学』と『法哲学』を中心に——

小島 優子（高知大学）

ヘーゲル哲学において、男性と女性とがどのように捉えられているかについて、『精神現象学』および『法哲学』を通して考察する。これによって、ヘーゲル哲学において、どのように生物学的な性差と歴史的文化的に形成された性差とが絡まり合いを示しているかを解きほぐすことを試みたい。

現代的な観点からヘーゲルを考察する時に、ヘーゲルはフェミニズムの立場から家父長的な見地にあるとして批判がなされてきた。ボーヴォワールとミルズを中心にヘーゲルに対するフェミニズムからの批判を確認する。

フェミニズムからの批判に対して、第一に男女の性別役割分業についての時代的な観点、第二にヘーゲル哲学に内在的な観点から検討を行う。

第一に、ヘーゲルの生きた時代における性別役割分業的な立場から、ヘーゲルは女性と男性に各自の役割をどのように割り当てていたのかについて確認する。ヘーゲルの時代と現代の我々との間で時代背景が異なるために、我々は男性と女性にそれぞれの役割を課すヘーゲルの思想に対してある種の〈後ろめたさ〉を感じざるをえない。女性であること、あるいは男性であることは、哲学的に思想を行う際に、どのように取り組んで対処しなければならない課題であるか検討したい。我々が哲学的に思考する際に、男女の差はない。しかし、身体的な性差があり、さらにヘーゲルの時代において男性と女性とが歴史的文化的に形成されてきたことを考慮した上で、男女に性別役割分業が課せられていることの意味を検討する必要がある。

第二に、『精神現象学』「理性」章、「理性的な自己意識の自分自身による現実化」、「快楽と必然性」節、および「精神」章「真実な精神——人倫」では、精神において女性と男性とにどのような役割が課されているかについて確認し、『法哲学』において言及される男女の役割との差異を考察する。『精神現象学』においては、女性と男性とが各自の役割を果たしつつ、精神的な運動性が形成される。それに対して、『法哲学』においては、家族、社会、国家における役割の中で男女の果たす役割が論じられる。

この考察を通じて、ヘーゲルは現代フェミニズムからの批判にどのように答えることができるのか、さらにヘーゲル哲学は、現代的な視野から性差の哲学を検討する際に、何らかの解決策を提示する可能性を見出すことができるのか、検討したい。



## 【シンポジウム要旨（2）】

### ヘーゲルと家族史

岡崎 佑香（ヴッパータール大学）

本発表は、ヘーゲルが『法哲学要綱』、法哲学講義ならびに歴史哲学講義で展開した家族論を精読することで、ヘーゲル哲学における家族の歴史性を明らかにする。

近年のフェミニスト哲学によるヘーゲル哲学へのアプローチは、従来のヘーゲル研究において看過されてきた、ジェンダー、セクシュアリティ、家族についてのヘーゲルの見解を明らかにするという重要な貢献を果たしてきた。とりわけ、『法哲学要綱』家族章で展開された婚姻や相続法について、あるいは、『精神現象学』精神 A 章においてソフォクレスの『アンティゴネー』を題材に論じられた、家族/ポリスあるいは女性/男性のコンフリクトについてのヘーゲルの議論は、これまで多くのフェミニスト哲学によって議論され、ヘーゲルは家族関係における女性のあり方を、固定的、非歴史的なものと捉えている点で一方では批判され（Benhabib 1996、Mills 1996 など）、他方では現代のフェミニズム・クイア理論へと積極的に援用されている（Hutchings 2010、Taylor 2013 など）。しかしながら、こうしたヘーゲル哲学の批判的・肯定的受容の前に、方法論的に問われるべきことがあるように思われる。それは、ヘーゲルはそもそも〈家族一般〉なる超（非）歴史的な概念を問題にしていたのか、あるいは家族の持つ、安易に普遍化されえない歴史的に固有の形態を扱っていたのかという問い（Schnädelbach 2000）である。

こうした背景をふまえ、本報告では、「歴史哲学講義」においてヘーゲルが一方では自由の進展の歴史の外部に家族を位置づけようとしながらも、同時にそうした歴史的進展が家族の形態にもたらした影響を論じている点に注目し、家族の歴史性の具体的位相を分析したい。しかしながら他方で、ヘーゲルがゲルマン世界における家族の形態を、家族の最終形態とみなしていることもまた見逃されてはならない。『法哲学』で論じられるような家族の形態に対しては、既に 19 世紀以来多くの批判が寄せられてきた。それゆえ先述の家族の歴史性についてのヘーゲルの洞察を踏まえれば、ヘーゲルの生きていた時代、ならびにその後の歴史の進展において、ヘーゲルの提示する家族の形態にいかなる問題点があるのかを明らかにする必要がある。この作業は同時に、我々の生きる現代において通用している家族論をまた歴史化し、その限界と問題点を見出すことに寄与するものである。

### 【シンポジウム要旨（3）】

#### アイデンティティ・ポリティクスの再生 ——米国のフェミニズムと近現代ドイツ哲学の遺産——

池田 喬（明治大学）

社会的アイデンティティをベースとした運動は、集団の内部を等質化し、集団の内外を分断する。政治的概念としてのアイデンティティに対してはこうした弊害が指摘されてきた。同じ女性と言っても、たとえば米国の社会状況において、ヨーロッパ系白人の女性と非ヨーロッパ系で有色の女性とでは、経験の意味がまったく異なるのだ。

ところが、人種問題の当事者である有色フェミニズム（color feminism）の論者には、アイデンティティ・ポリティクス（IP）を拒否するのではなく、むしろ IP を拒否する主流の論調自体に、アフリカン・アメリカンやラティーノ・アメリカンの女性への無関心や無理解が反映されていると告発する者もいる。こうした複合的アイデンティティを生きる立場からすれば、アイデンティティは自己同一性や固定性を意味するどころか、両義性や流動性を特徴とするのであり、外側から押し付けられた人種や性差のカテゴリーによる自己規定をかえって不可能にする。

その一人である L.M.アルコフは、IP を拒絶する見解の背景に、社会的アイデンティティは何であれ自律性への脅威になるという病的な恐怖を見出している。だが、自律的／依存的、内部／外部といった二分法から離れて、他者とのつながりが自己理解に与える積極的影響、自己理解の条件としての歴史的な文脈や状況依存性などを哲学的に考察してみればどうか。そのとき、IP は（あらゆる戦略と同様に）困難を抱えてはいても、依然として意味ある実践であると判明し、むしろその拒絶に含まれる問題を指摘できるかもしれない。

アルコフや M.オルテガのようなラティーノ・フェミニストたちは、自己やアイデンティティについての関係論的・状況依存的な見方が、米国の理論的言説においてなかなか顧みられない状況において、その見解の基盤をハイデガーやガダマーの解釈学的アプローチという現代ドイツ哲学（の主流）に求めている。世界内存在とは原理的に他者と一緒に存在することであり、歴史的状況へと私たちは他者とともに投げ込まれている。状況とは理解を外部から決定して自由を阻むものではなく、むしろ、閉じることのない地平を成し、自己理解を絶えず生成・更新させるとともに、他者の観点から世界を理解することも可能にする。伝統や歴史のように保守的イメージをかきたてる概念が、有色フェミニズムにおいては変革ツールとして再発見されている。アルコフは、ヘーゲルをこうした 20 世紀の解釈学的アプローチの前段階として位置付けている。

発表では、近現代ドイツ哲学の遺産というこの観点から、ヘーゲルが現代フェミニズムに対してもちうる意味を示唆するだけでなく、IP の再生を語るときにどういう反論と向き合う必要があるのかも検討材料にして、ディスカッションを活性化したいと考えている。